

耳みみなし  
芳ほういち一  
の  
は  
なし



いま  
今から七百年あまり

まえ  
前のこと、下の関海峡

1  
壇の浦で、長らく

てんか  
天下の 2 覇を争って

3  
いた 源平両氏のあい

さいご  
だに、最後の決戦がた

たかわれた。この壇の

うら  
浦で平家は、一門の女

こ  
子ども、ならびに、

4  
こんにち 安徳天皇と

きおく  
記憶されているかの

5  
幼帝と 6 もろとも

に、まったく滅び絶え

てしまったのである。

ご  
その後七百年のあい

だ、壇の浦の海とあの

へん 1 帯の浜べは

ひさ  
久しいこと平家の

7  
怨霊にたたられて

いた。あの浦うらでとれる

<sup>1</sup>平家ガニへいけというふし

ぎなカニ 甲羅こうらに

人間にんげんの顔かおがついてい

て、平家へいけの武士ぶしたちの

怨おんりょう霊りょうだといわれてい

るカニについては、わ

たくしは <sup>2</sup>べつのとこ

ろで述のべておいたが、

いまでもあのへんいったい一帯

の海岸かいがんでは、かずかず

の不思議ふしぎなことが見みた

り聞きいたりされるので

ある。闇やみの夜よるに、幾いくせん千

ともしれぬ <sup>3</sup>陰火いんかが浜はま

べにあらわれたり、波なみ

の上うえをふわふわ飛とんだ

りする。これは俗ぞくに

漁師りょうしどもが「鬼火おにび」と

いつている青白あおしろい光ひかり

ものであるが、そうか  
とおも  
と思つとまた、風の荒  
かせ  
あら  
く吹きすさぶようないひ  
ふ  
日には、きまつて沖の方  
おき  
ほう  
からは、きまつて沖の方  
おき  
ほう  
から、ちようど<sup>1</sup>合戦<sup>1</sup>  
かつせん  
ののりの<sup>2</sup>関<sup>2</sup>の<sup>2</sup>声<sup>2</sup>の  
こえ  
ののりの<sup>2</sup>関<sup>2</sup>の<sup>2</sup>声<sup>2</sup>の  
こえ  
ようない、すさまじい  
ようない、すさまじい  
<sup>3</sup>おたけびの<sup>3</sup>声<sup>3</sup>が<sup>3</sup>おこ  
こえ  
つたりするのである。  
つたりするのである。  
昔<sup>むかし</sup>は<sup>むかし</sup>しかし、<sup>むかし</sup>そう

した平家<sup>へいけ</sup>の怨<sup>おんりよう</sup>霊<sup>りよう</sup>も、  
へいけ  
おんりよう  
こん<sup>くら</sup>に<sup>くら</sup>ちに<sup>くら</sup>比<sup>くら</sup>べると、  
くら  
もつともつとさかんに  
もつともつとさかんに  
<sup>4</sup>跳梁<sup>4</sup>して<sup>4</sup>いた<sup>4</sup>もの<sup>4</sup>で  
ちようりよう  
あつた。夜<sup>よる</sup>、沖<sup>おき</sup>を<sup>とお</sup>通<sup>とお</sup>り  
よる  
おき  
とお  
かかる船<sup>ふね</sup>の<sup>ふね</sup>ほとりに<sup>ふね</sup>あ  
ふね  
らわれて、その船<sup>ふね</sup>を<sup>ふね</sup>沈<sup>しず</sup>  
ふね  
しず  
めにかかつたり、ある  
めにかかつたり、ある  
いは海<sup>うみ</sup>で<sup>うみ</sup>泳<sup>およ</sup>ぐ<sup>およ</sup>者<sup>もの</sup>など<sup>もの</sup>が  
うみ  
およ  
もの  
あると、それを<sup>ま</sup>待<sup>ま</sup>ちか  
ま

まえていて、いきなり  
水の底へひきずりこん  
だりしたものだ。あの  
寺という寺が 1 赤間が関に 2 阿弥陀  
寺と 3 建立  
されたのは、つまりは  
そうした平家の怨霊  
を 4 供養せんがためだ  
つたのである。寺の  
5 地尻の、浜に近いと

こは、ひとくるわの  
墓所も設けられて、そ  
こには、6 入水した  
天皇のみ名や 7 歴臣た  
ちの名前をきざんだ、  
幾基かの 8 墓碑が立  
られ、毎年 9 忌み日に  
なると、かれらの  
10 菩提をとぶらうため  
に、さかな 11 法会